

・薬手帳とか、障害者手帳とか、娘に関するいろんなものは一つにして、いつでも持っている状況にしておかなくてはいけないと改めて思いました。

## 9) ネットワークについて

### ①近隣・友達

・私の兄貴を知っている人が多くて、声をかけてくれますが、私にとっては全然わかりません。

・友達にあうことはほとんどありません。どこに避難しているかもわからないので、連絡のしようがありません。

### ②専門職のかかわり

・常に見ている顔はわかるけれども、その緊張……。本当に、その状況になったときは変わるじゃないですか。いつもは、このぐらいだったら大丈夫な人だけれども、あの体験は、私たちでもパニックを起こすぐらいだったので、どういう状況に陥るかわからないわけじゃないですか。だから、その辺の弱い者のケアというか。もちろん、これは今後の材料として勉強していかなくてはならないし、守っていかなくてはならないところだけれども、もうちょっと手を伸ばしてやってもらえたら助かります。

・行政は、障害のそういうケアをしても、最初に老人に目が行くじゃないですか。避難先に行っても仮設に来て、老人のケアは、社会福祉協議会とかがすぐに手を出して、「大丈夫ですか」と声をかけてくれます。でも、うちもそうでしたが、障害児の場合は、言ってきてくれません。「大丈夫ですか。今、どうしていますか」という声かけにも来てくれないし、作業所や生活介護その他施設も利用するにも、こっちから出向いていって言わないと、そういうことを言ってきてくれません。知らない土地に行っているわけだから、どこにどういう施設があるかわかりません。それをいち早く調べて提供してもらえれば、そこでまた支援する方々に相談させてもらえます。自分の子どもに合った施設に通える状況・状態を作ってもらいたいです。そうすると、不安も少しずつ薄れていくだろうし、また新しい友達を見つければ、そこでの楽しい生活で、ストレスを発散させることもできると思います。

・お年寄り見守り隊みたいなのが訪問してくれるといいですよ。

## 9. 福島・富岡町／入所施設・職員

ヒアリング実施日：2012年11月18日

参加者：支援員4名・事務局長1名、計5名（施設長を含む）

### 概要

原発による避難を体験した社会福祉法人の職員を対象に、避難の経緯や課題についてグループヒアリングを実施した。

情報が無い中での大人数での避難の困難さと、法人全体の再建および利用者・職員・その家族の生活再建とが重なった中で、職員に過剰な負担がかかる現状と、その解決方法を模索する姿があった。

#### 1) 発災日

・ワークセンターさくらでは、その日は職員会議がありまして、午前中の作業で終わって、ホームの方とか、送迎を始めたんですね。まあ1時間程度かかるんですけども、大体送迎から帰ってきた頃、震災が起こったってということですね。施設のところには利用者さんはいなかったのですが、一番心配なのはホーム生ですよ。ホームに送っていった方。それ以外の方は在宅だったので、そこは家族がいるだろうということで、大丈夫だったんですが、やっぱり、ホームの方の安否が一番気掛かりで。

いる職員で2班ぐらいに分かれて、まず、ホームを巡回してくれと。そして、ホームに行くと、その障害ホーム生の方をさくらに連れてきたというか。そんなことをまずやりましたね。誰もけがした方がいなくて、本当によかったなという状況でいました。

・とりあえず、施設の中で。あの日って本当に寒かったんですよ。雪も来たりとか。あとは、その地域の方が、津波警報が防災無線で流れた関係で。地域の例えば、下に東邦銀行があったんですね。「さくら」がちょっと高台なんですけど、その銀行の行員が、津波が怖いから高台に上がってきて。そんなことで、何人か地域の方が集まってきて、「さくら」のバスに「じゃあ乗ってけ」なんていうことで、暖を取ってもらったような感じだったんですけども。

そんなことをしながら、余震も結構何回も何回もあったものですから、局長が本部にいましたので、本部とやり取りをして、これはホーム生がホームに戻るわけにいかないの、建物もかなり破損しているところもあったもんですから、夕方、光洋（愛成園）に行って、光洋で一晩過ごしたということですね。

・私が勤めている施設では、その当日は外出の行事があって、皆さんが出かけて、早めに、ちょっと寒いので、寒い日だったんですね。寒い日だから、ちょっと早めに帰ってきて、

後片付けとかして、皆さんを中に誘導して、着替えやらいろんなものを片付けているような時間帯だったかなと。

私は事務所のほうにいたんですけれど、で、大きな揺れがあって、本当に事務所のがみんな、水槽やら棚やら何やらガラスケースやらすべてが倒れこんでくるような状況で危険なので、それを押さえたりとかしながら、揺れが収まるのを待って、それから、利用者さんのほうは、確認したら皆さん大丈夫だということで、利用者さんのほうを確認して、利用者皆さん無事だったことで、あとは、ちょっとまた片付けをしたり。揺れの様子を眺めているうちに、多分、大きな地震で津波も来るってことで、多分ワークのほうからも皆さん、利用者とかいろいろな方たちが集まってきて、避難するというかたちで、グループホームの方とかが集まってきて、そこら辺の受け入れをしながら。

・あとは、「今度は夕食の心配もあるね」なんて言って、近くのヨークベニマルでしたか、開いてるお店とかから、事務の方とかが早めにお金を持って、現金をかき集めて、食料とかもの、いろいろな必需品とか買い出しに行かれて、ちっとも状況がそれまでわからなかったんですけど、その状況で、津波がそこまで来るとか、水がそこまで来るとか、いろんな情報ももらいながら、スーパーとか水浸しだったって言ったんですよ。

・中のほうは中のほうでいろんな受け入れとかの、寝る準備とか夕食どうするとか、これからのことどうしようなんて話をしながら、ばたばたと過ごしている感じでした。もう電気も消えていたので、夕食は、パンか何か買ってきたものを食べたんですよ。買ってきたものをみんなで分け合って食べるかたちで、電気も通らないで暗いので、早めに食べて。電気もないので、車のライトとかで照らしながら、ちょっと明るくして、いろんな用事済ませて、「早めに就寝しましょう」なんて、お布団を敷き詰めて、皆さんで寝るような状況を作って、お布団を敷いて、やっぱり寒い日だったんですよ。「寒いな」なんて言いながら、余震が、ほんとにすごい間隔で来る余震で、皆さん、「すぐに逃げなきゃいけないのかな」とか言って、窓も開けたような状況で、いざとなったら外に出なくちゃいけないっていう感じで、夜中、一晩過ごしました。

・あと、その間やっぱり職員も、出たり入ったりとかして、そのときは、明日の勤務のことを考えていました。「じゃあ、明日来るから、今日一度戻って、家族の無事を確かめよう」とかいう方たちもいたんですけど、車が、道路が寸断されている状況で、帰るのにも何時間もかかるとかいう話で、帰れる方もいれば、帰れないでそのまま泊まる方とか、いろんな方がいました。

私はその当時、サポートセンターっていうところで、ケアホーム、グループホームのほうに勤務していたんですけど、当日は、たまたま私はお休みだったんです。それで、アパートのほうで地震に遭いまして、まず思ったのが、「私は休みだったけど、どうしよう」って思ったのと同時に、まず事業所に連絡しなければいけないっていうことで、電話を何度もかけたんですけども、電話はつながらなかったです。

・私が住んでるところは富岡町で、事業所は隣の檜葉町にあったんですけど、多分檜葉町

の事業所には、他の職員がいらっしゃるので、じゃあ、私は富岡町の、ちょうど2時46分でグループホームの方々が、戻られない時間帯だったので、とりあえずホームを回ってみようということで町内に出たんです。

やっぱり所々道路が寸断されていて、いろいろ脇道を行きながら、まずその時間帯に確実に戻っている方が1人いらっしゃったので、そこのホームに行ってみようと思って行ってみたら、もう既にワークセンターの職員の方が、そこのホームに戻られている方を、ワークセンターさんのほうに連れていってくれたんですけど、そこに「何とかさんは無事に事業所のほうにいましたので」というメモ用紙が残ってあったんです。それを見てほっとしました。

次に、アパートに住んでいる方がいたんですけど、そのアパートに住んでいる方がちょっと心配で、その方が勤めている勤務先にちょっと寄ってみたら、案の定、その方はその勤務先で、バスの中で避難していました。

それで、私と一緒にあって、2人で次はどうしようっていうことで、多分ワークセンターさんの方が、グループホームの方は避難させてくれたので、その方と2人で光洋愛成園の本部のほうに避難したところ、やはり各事業所から集まってきていて、私もその方と2人で行動して、その利用者さんは光洋愛成園さんにいてもらって。あとは、次に考えたことは、ちょっとまだ所長と連絡があったので、まず、 tonightはもうホームに帰られるのは無理だろうっていうことで、グループホームを回って薬だけは持ってこようっていうことで、回っている途中に、今度はホームに行ったら、やっぱり世話人さんの字で、「服薬と着替えを愛成園のほうに届けます」というメモがありました。そのメモを見て、「ああ、世話人さんも動いてくれてるんだなあ」ということで、ありがたかったです。

・榎葉町で過ごしていたグループホームの方が、世話人さんの家に避難したっていうことで、私どもと離れてしまったので、次の日の朝、合流しようっていうことだったんですけど、ちょっと心配になったもので、世話人さんも自分の家のことがあるので、夕方、所長の許可を得て、2時間かけて隣の榎葉町まで行って、2名の利用者さんと薬と一緒に戻ってきて、本部で一緒になったっていうことなんです。道路の状況がひどく、とにかく運転するのも怖くて、初めて一緒に男子の職員さんで行ったんですけど、その方に運転をお願いしました。

・私は利用者さんとずっと一緒にいたので、作業場で空き缶作業をやっていたんですけど、そのときに、ものすごい印象的なことがありました。自閉（症）の方で多動な方がいまして、その方が、地震が来るちょっと前に、いつもは時間の前にみんなの手袋を、もう終わりだと片付けてしまうんですが、その方が、私が静止をしているときに、一瞬止まって空を見たんです。ずっと空を見ていまして、普通だったら、私が声をかけて、そこではどこっちを見て気が付くのですが、しばらく上を向いていたもんですから、「どうしたんだ、どうした」という感じで、しゃべっていたら、地震が来ました。

利用者さんも、尋常じゃないと思ったのか、私が声が大きかったのか、その場に留まっ

てやり過ごしてくれたんですけども。で、止まったあとに、皆さんの集まっているところに行ったんですが。

私たちも、尋常じゃないと思いながらも、まさか3日も4日もってというのはなくて、この1日だけ過ぎれば終わるだろうなんて、私も思っていたもんですから、「いやあ、大変だったな」と地震の感想ばかりで、先の見通しなどまったく話さずにいたと思います。

ただ、そこに集まったときには、いつも避難訓練などでは部屋に寝ていて、もう「俺は絶対に参加しない」という方がいたんですが、その方は、皆さんと集まる避難場所にしっかりと来てくれました。その方はその方で、やっぱり、尋常じゃないっていうことを察知してくれたんだろうなとは思いましたね。

・津波は、業務用に無線がありますよね。あれで、津波警報が発令される。で、6号線のところにあるヨークベニマルまで波が来てるっていうような情報がどんどん入ってくるんですよ。「ああ、じゃあ、かなりの津波だな」って。ただ、その時点では、原発がどうのっていうのは全くないんですよ。

・私もその日は、光洋愛成園本部にいまして、施設長室にいました。原発のことですから大丈夫だって感覚がありましたよね。でも、いつになく、縦揺れの地震の怖さっていうのを初めて知りました。その日は、空き缶のグループと、あとは外出から帰したグループといまして、それから、教育実習生も2人いたんですよ。この方たちを送っていかないのに、送っていくのに何と時間のかかったこと、ということですよ。その夜は、停電。防災無線は聞こえなかったですから。防災無線は、場所的に聞こえません。情報は携帯くらいのものですよ。ラジオも。電気は通じませんから。で、携帯で3時10分、15分くらいでしょうか。各事業所の施設長に電話を入れたんですよ。その結果を理事長に報告しなくちゃならないと思って。

日中の活動については、光洋愛成園は43名。40名定員でしたけども、43名いたと。各事業所から、うちに帰れない方が集まってきて、3時半くらいには、4時前には皆さん集まったと私は思います。最終的に66名が光洋愛成園に集まりました。で、1泊しました。1泊も、全員じゃあ、次の日のことを考えるからということで、いわきの人たちも帰ったらと。ところが帰れなかったですよ。道が寸断して。で、いわきの人も残ったということで、最終的には25名くらい職員が集まったんです。25名くらい集まって、私を含めて15名の職員でその日は夜勤態勢を組みました。

・夜は暗くなると皆さん不安ですから、あるだけのサーチライトを上向きにして、あとは公用車のライトを当てたり、あとは、非常用の発電機がありますので、発電機を使ったりと。

## 2) 職員の家族の安否・利用者の家族への連絡

・職員全員がそうなんですけども、結局三春に避難してからもそうなんですけど、ガソリンがなくて、車が動けない。それから、電話も不通。ということですから、当然みんなそ

うなんですけども、家族の安否が取れない。ということで、やっぱりそれは一番不安でしたよね。

・果たして家族がどこに逃げたんだというのがわからなくて、大丈夫なのかなっていう。もしかして、どこかでけがしたのかなとか、いろいろ思いを巡らせたんですけども。だから、電話がつながるまでは、三春に避難している中でも、皆さんやっぱり本当にそのことが不安でした。

・NTTさんが、避難所に電話をつなげられるように、仮設というかそういうのを設置してくださったんですよ。それで、すごい列なんですけども、皆さん同じ状況ですから。家族とは2・3日経ってから電話で確認できました。

・自分の家族のことまで頭が回らなかったですよ。三春に行って、そこでやっとならして設営してですものね。混雑して、携帯が通じませんから。できるだけ保護者の方に安心して、「安全ですよ」というところを、「この辺に避難してますよ」ってことを知らせるためにどうしたらいいかなと考えました。

最終的には、TV局の電話での取材に応じて、それを流してもらおうというようなことを取りましたけれども。あとから、ばら一つとメールが入ってきたりとか。双葉郡の施設ですので、双葉郡の方からみんな避難していますから、勝手に電話したって通じるわけじゃないですよ。

・私自身、配偶者が同業者なもので、電話が1回つながったときは、配偶者は帰ってきてない、子供2人が右往左往している様子を聞いていましたが、帰りたくても道が寸断されて帰れなかった状況でした。なので、私は、利用者さんは守る人間がいるけれど、自分の家族を守れなかったなと思って、そういう後悔もありました。施設長は、「うちのことは考えなかった」って言うんですけど、私は、避難したらしょっちゅううちのことを考えていました。きっと利用者の皆さんと過ごすことでまだ自分も多少正常な感覚でいけたのかななんて思っているんですけど。今思っても、その数日間は、何か夢のような感じですね。

### 3) 避難時の利用者の様子

・利用者さんのほうについては、なぜか皆さんそんなに不安定になるっていうか、暴れたりとかそんな方もいなくて、なぜかこの状況の中で大変な状況の中なんですけど、皆さん声かけに応じて行動してくださったのがありがたいな、なんて思っていました。やっぱりちょっとおびえた方も多かったんですけど、職員が付き添っていろいろしたおかげでか何か、状況が大変な状況だってわかっていただけたのか、それほど大きなパニックになる方もいなかったのが、とてもありがたかったかななんて思って、その当日は過ぎました。

・移動中は、ご飯も朝食食べたきりで、ほんとに食事もないような状況で、飲み物もないような状況だったのに、不思議に利用者さんも、何を言うでもなく、ほんとに淡々と付いてきてくれて。トイレとかは大変だったけど、付いてきてくれて、私たちが空腹を感じると

か、そういう感覚も不思議となく、ほんとに夢のように、何か全然進まない行列を延々と進めて。

・朝出でずっと、夕方、そこの避難所に着いて、「今日はここに泊まれるんだ」って思って、利用者の皆さんと荷物を降ろしたときに、利用者さんが、「これからカラオケをやるのか」って私に言われたんです。その利用者さんにとっては、多分旅行ぐらいの感覚だったんじゃないのかなっていう感じで、その利用者さんからしてみれば、ここが今日の宿で、これから宴会でカラオケをっていう感じで、声をかけてくれたんでしょけど、それを聞いて私はもう、何とも……。利用者さんにとっては……。

・何かわけわかんない状況だったんですよね。私たち自身も説明を果たしたかななんて、ちょっとあとになってから、説明をして差し上げたかなという気持ちはあって。ほんとにただ「危ないから逃げよう」みたいな感じで、「今日はここに寝るんだ」とかって、ほんとにそういうことも、もしかして説明はしてこなかったことなのかなとか、ちょっとそういうことは思いましたね。

・施設の場合だと、年に1回くらいしかカップ麺は食べないんですよ。防災の日くらいしかね。何かにかこつけて食べるんですけども。ところが、毎日ですから。利用者にしてみたら、ほんとはうまくないんですけども、おいしいんですよね。おいしいっていうか、好きなんですよ。だから、今言ったとおり、何か勘違いしてて、毎日が旅行みたいな気分の人の中にはいたかもわからない。雑魚寝の状態ですからね。だから、1日っていうのは食べ物を中心に動いてる感じでした。「朝来て、夜来て、次は何にしましょうか」って感じですよ。

#### 4) 翌日の避難

・翌日7時頃、地元の消防団が、「原発が危ないから避難してください」と。そのあと、30分くらい過ぎてからでしょうか。町の広域消防が来て、「避難してください」と。同じことです。原発が危ないからということで。「町の指示する川内村の体育館に避難してください」と言われて、ちょうど食事中だったのですが、急ぎ準備して、施設を出たのは、8時40分くらいでした。マイクロバス2台。ワークセンターからもマイクロバスを持ってきてもらったりして、できるだけ大きな車ということで、マイクロバス2台にワゴン車ですね。8人とか10人乗りを5台、合計7台で避難しました。そのときは、「もう夕方には帰れるんだろうな」っていう感じですよ。状況を把握していなかったから。できるだけ、早く出なくちゃなんないっていうことなんで、薬とかちょっとした飲み物を持って逃げたということです。

川内村に行く途中で、もう車がいっぱいだからと止められたんです。それが幸いした部分がありますよね。体育館で障害を持っている方と一緒に生活した場合には、一般の方もほんとに神経を使うでしょうからね。そういう意味では、遅かったのが幸いしたのかも。それが、早く避難したところは、体育館で2日くらいしかいられなくて、次々次々移動し

たという経緯はありますよね。やっとの思いで、町の指示で（健康増進センター）リフレ富岡に行って、そこから町のバスで最終的に三春の（福島県立）田村高校に行っていたということです。

・原発は「安全だ。安心だ」って私らも思っていましたから。その辺がネックだったんでしょね。幸いにして、結果的に利用者の被害はなかったってこと、職員の被害もなかったってこと。ただ、職員のご家族が、今回の津波でお二人ほど亡くなっているっていう事実はありますけれども。

・すぐ避難だって言われましたけど、とりあえずご飯をみんな食べてからってことで、ご飯を食べて。あとはトイレも水が流れていなかったですけど、トイレに行くしかないの、トイレに行きたければトイレに行ってもらって。

そのときは、川内（村）とか、近くに避難するって言われてたので、普通におむつとかをして、準備ができた方から、順次バスに乗り込んでくださいって感じだったんですけど。ただ、そんなに状況がわからないので、特に焦る様子もなく、とりあえず避難って言われているんで、準備ができれば、「じゃあ、行こう」みたいな感じだったですね。

私自身も、利用者さん皆さんも車に乗ったあとに、何かがあって行くのに時間が空いたものですから、とりあえずと思ひまして、倉庫にあるトイレトーパーをありったけ一応持ってきたんですけども、水が流れていないので、「トイレトーパー使うかな」なんて思って、安易にそれだけ、あるもの全部持ってきたんですけど、避難所に行ってそれが随分役に立ったもので。枕になったりですとか。

・ちょうど食事の介助をしていたんですけど、「避難するぞ」って言われた瞬間に、もう私は、「じゃあ、ホームに行って、皆さんの薬や着替えを持ってこなきゃいけないな」って思って、そこからはもうちょっと忙しくて、もう1人の職員さんをお願いして、各ホームを回って、お薬はとりあえずは持ったんです。そのときに私も、2、3時間の避難なんだろうからってことで、薬は多分余分に持ったと思うんですけど、皆さんの着替えまでは思い浮かびませんでした。あとはホームに置いてあった、おやつになりそうなお菓子やバナナを袋に詰めて、そこから先はちょっと忙しかったですね。1時間半のあいだにホーム5カ所回りましたので。

・朝、避難する用意って指示が出たときに、ほんとに準備をしなくちゃいけないものってのは、まずは薬っていうふうに思いました。薬なんて、結構4、5日分あったんですけど、「荷物は最低限にしましょう」って感覚がどこかあって、ほんとにいっぱいあった薬の中から、わざわざ2、3日分しか持たないで、ほんとに最低限の荷物と最低限のものでいいだろうってことで、自分の個人的な荷物もお財布一つだけ持てばいいやぐらいで。ほんとに明日にでも帰ってこられるようなつもりでいたので、もしもあのときに、「しばらくかかるぞ」って言われたら、私たちの準備ももっと変わったし、避難所での生活ももっと快適な、もう少しいい状態で利用者さんを置けたんじゃないかなと。

・処方箋も持たずに、ほんとにお薬だけ持って、そこら辺の貴重品と資料とか住所ぐらい



持ったんでしょね、きっと。保護者さんの連絡先ぐらいのものは持ちながら、ほんとに金庫の中のお金とかかき集めて、現金が必要だろうってことで。

## 5) 困ったこと

・当座のお金が欲しかったんですよ。通帳も印鑑も持ち出せませんでしたから。三春で、最終的には100万円ずつ、2回下ろしたんです。着替えもパンツも歯ブラシも何もなかったですから。ところが、100万円下ろせないんですよ。最初、「だめだ」って言われたんですよ。銀行の本店に行ったのですが、銀行自体がもうパニック状態で、そういう問い合わせもたくさん今あって、どこまで決済なしでも出せんだっていう、今それを話し合いをしてるっていうことだったんですね。けども、そんなこと言ったら、もうわれわれ何にもなくて、避難してきて、食べるものも着るものも何にもない。ほんと死んじゃうぞっていう話をして。で、名前書いて、拇印で。お金を借りたいっていうことではないんですよ。預金しているお金を出せって言ってるわけだから。かなり言い合いましたけども。

・ちょっと衣食住がよくなった分、次に来るのは、利用者さんのいろんな感情が出てきた分だけ、次の対応が来るっていう感じで、いつまでこういう生活をして負担を強いるんだろうって、次に出てきて、次の日には先を探すような、いろんな時期に来て、刻々と状況は変化して行って、利用者さんにも、何か別なストレスがかかったんだろうなという時期ではあったので、タイムリーに、現在いるところに来られたことが、また次の幸運だったのかなと。

本当に遠かったんですけど、近くにあればもっとよかった。福島県内にこういう感じであればよかったんだろうと思うんですけど、利用者さんの生活を考えたらよかったんでしょかね。

## 6) 情報のなさ

・出ていく車は混んでたけども、入る車はすーすーなんですよ。入ってくる車の中に、茨城交通のバスが何十台も走って来ますよ。町でチャーターしたバスですよ。でも、前の日辺りにチャーターしなければその日に来れるわけじゃないですよ。郡山経由で来るわけですからね。原発の状況は、最近になって、11日の夜にどうなってっかって、電源が喪失してメルトダウンっていうのは、東電（東京電力）も国もわかっていた話なんですよ。当座、最初3キロ圏内は避難指示出すかっていう話でしたよね。大熊には、そういう情報が夜流れたんですよ。だから、バスをチャーターできた。私たちは、情報がほんとに限定的なものだからこそ、ああいう避難にならざるを得なかった。みんなそうですけども、生きるための情報が、ほんとになかったですよ。

・そういう中で、あとは自己判断ですよ。「(田村市役所) 大越体育館に行ってもいいいだ。どこに行ってもいいいだ」「じゃあ、どこに行くの？」っていったら、「西のほうに向かってください」って。行った施設では「20名だったら受け入れますから」って言うん

ですよ。それはできないと思って、ご飯も、朝飯以外食べていませんからね。そういう状態で、あとは自分で探すしかない。

野宿まで考えましたよ。この車の中でね。野宿だってトイレが必要ですから、水道が必要ですから。自分の先輩がやっている施設を借りようとしたんですが、そこもやっぱり、自分の系列の施設を受け入れるために、「わりいな」っていうことなんですよ。

最終的に、さくら湖自然観察ステーションていうところを私たちだけに開けてもらえた。そこに着いたのが6時半くらいでした。途中寄った施設に着いたのが5時半くらいでしたから。何だかんだやり取りしたりして、暗かったですので、行ったのは6時半くらい。

そこは、このピータイルのところに、段ボールだけは、資料館でしたのであったです。段ボールを潰して、びゅーっと敷いてもらって。毛布をやってもらって。毛布ってのは、備蓄であるんじゃないですかね。毛布をかけて、毛布を敷いて、というような状態でした。そこは、暖房も水道も電気も全然OKだったもんで。多目的トイレもあったし。避難所としてはすごく快適だったと思う。ただ、狭かった。やっぱり男性と女性を区別しななんので、区切りを付けて、仕切りがあったもんですから。分けて、とりあえず寝る準備ができたという。もう疲労困憊（こんぱい）ですからね。そんな状況でした。

・移動中は、トイレがほんとに大変だったんですよ。民間の方のところをお願いして、トイレとか借りたんですけど、そこの方たちが、普通に寝転がってテレビ見て、「何があったんだい？」みたいな感じで、私たちに、「随分にぎやかだけど」なんていう話をして、「地震、これこれこういうわけで」なんて言っても、何かぴんとこない感じで。皆さんはすごく普通の生活をしているのに、私たちだけが着の身着のまま、トイレの場所も困っている状況が、その道中は、何か夢のようでした。

・情報がなくて、三春の途中で、その道中で初めて新聞を渡されたんです。その新聞で初めて、東京電力さんが爆発したかもしれないっていう号外の新聞を見て、そんなに大変だったんだっていうことを、そこで初めて……。

・何せ、動きがわかんないからね。テレビを設置してもらったんですよ。昔のですから、後ろの長い、薄型じゃないんです。あれを設置してもらって。そしたら、女子のほうも欲しいって、女子のほうも設置してもらったんだけど。そういう自分らのペースで、その場所だけで動けたってのがよかったですよね。

## 7) 社会資源の利用

・初めの病院はなんかちょっと大変だって断られて、別な病院に何軒かあたりました。精神科の薬も結構な量なので、特殊な薬もあるので、っていったら、何軒かして、行った病院がちょうどいい先生に当たって。薬しか持ってこない現品から、その薬の内容をどうにか探し出してくださって、分量も調整しながらとか、特別な処置でいろいろ出し合ってくださったのが、そこのお医者さんに行けばいろいろやってくれるってことがわかったので、随分助かりましたねいろいろ相談しながら進めていけたので、理解あるお医者さんに行け

たのはありがたかったな。それも幸運だったのかなとは思いました。

- ・なぜか知らんけども、新聞を毎日5部とか10部ずつ誰かが持ってきてくれるんですよ。風評もあって、洗濯物も外に干せない。外にも出られない。外にも出ないほうがいいだろうということです。コインランドリーも、利用者の男子、利用者の女子、職員の男子、職員の女子、やっぱり分けるんですよ。そうすると、7,000円くらいかかるんですよ。1日ばかりです。皆さん並んでたそうですから。職員1人張り付けで洗濯に行く。洗濯機は2台あったんです。洗濯機はできるんですよ。そういう状態でした。

- ・ある意味組織的に乗ったから。自分らだけで使わせてもらったんでね。中途から打ち合わせしよう。今日の動きとか、昨日の反省も含めてやろうということでした。毎朝、職員の朝礼もやっていたんですけども、職員は最初15名でした。結局、少したってから他の場所に避難した職員にも連絡が取れて、「来てくれ、来てくれ」って言って、集まるようになって、最初からいる職員が少しずつ休む。避難しているところ、家族のところに行けるとかね。その前までは、15人で24時間、フルに一緒に過ごしていたんでね。ほんとに女子職員なんか、疲労がたまってる。

- ・隣は豆腐屋さん、向かいには保養所。で、翌日からみそ汁を届けてくれたんです。保養所のお風呂も、最初は無理だったけれども、そこに2週間ばかりいましたから、後半は、1時間貸し切りで使わせてもらったと。

- ・最初床に寝ていたのが、蒲団が来たりとか、だんだん寝る状況がよくなったですね。畳を入れてもらったときはうれしかった。畳ってこんなにありがたいんだって。三春の町の方とか、ほんとにいろいろ考えて、「何かないですか」なんて来てくださって、ほんとに受け入れてくださったのがありがたかったですね。

## 8) ストレスへの対処

- ・利用者さんもそうですけど、私たち職員もすごい大変なので、やっぱりストレス解消にちょっと歩かないとということで、すぐ下に三春の湖があったので、午前中はその辺まで歩いて、あとは完全に休むっていう態勢を取っていたんですけども、それで利用者さんのストレス解消にもなって。

午後からは、日課っていうものがあると、そこにいる職員は、一緒に避難しているときもほぼ仕事に追われる感じなんで、いつ休む時間もなかったんで、なので、午前中だけで、午後は完全に休みっていう態勢を取ってもらったのは、私らにとって、職員にはすごくよかった、よかったって言うのであればですけど、体調を崩すことなく避難生活を送れたかなと思います。

- ・体力も落ちたんですよ。利用者さんが歩けなくなっちゃったんですよ。小さな空間でばかり、トイレもそこにあつての空間だったので、あまり歩けなくなっちゃって。そういう意味で体力も心配になったので、歩行もしなくちゃ、ほんとに皆さん歩けなくなっちゃって、危機的な感じもありましたよね。

## 9) 今後への要望

・だから、最終的には共助・公助あつけども、一番最初はやっぱり自助努力ですよ。皆さんが落ち着いてからこそ初めて、共助か公助になるんじゃないかな。ただ、心配なのは、そういう責任は押し付けないだろうけれども、自分で避難先を探さなくちゃなんないのはおかしいだろうって。役場に電話入れたって通じません。県にだって通じないんですから。皆さん、そのとおりでパニックってますからね。

・障害者避難計画を作ってもらわないとだめなんじゃないかなと思います。今までのマニュアルって、ほとんど自然災害を想定しているんですよ。台風とか、大雨とか、それに対する対応なんです。今回の原発っていうのは人災ですよ。だから、人災は当然想定外の話なんですけども、そののところがしっかり、そこに入れたものを作っていかなきゃならないだろうな。それも、大規模の災害と中規模の災害、それから小規模の災害、そういうふういきちっと分けてやらないと、うまく機能しないんじゃないかなと思いますね。

・福祉の避難場所というのは、文字どおり障害を持っている人が優先されるべきなんですよ。けども、全くそういうことがないですよ。われわれが自分たちで探さざるを得なかった。だから、事前に、都道府県を越えた、あるいは市町村を越えた協定も、今、そういう話も出ていますけども、そういったことを含めて、そういったところは都道府県レベルでやってほしいなとすごく感じましたね。

## 10. 福島・富岡町／特別支援学校教職員

ヒアリング実施日：2012年11月22日

参加者：教員4名（校長・教頭を含む）

### 概要

原発による避難を体験した養護学校の教員を対象に、避難の経緯や課題についてグループヒアリングを実施した。

情報が分断されている中での安否確認の苦労と工夫、他に同じような体験をしている学校がないことから、周囲に理解されない辛さなどが語られた。子供だけでなく教員を支援していくことの大切さが浮かびあがった。新たな土地で仮設の学校を開校したが、地域との関係・子供の将来など、抱える課題は少なくない。

### 1) 発災日

・その当時は中学部所属だったので、その日は、下校が終わって、子どもたちを帰したあとで、職員室に先生方が戻ったり、あと、教室の片付けをしていたりというふうな状況のときに地震が起きました。そのときは、携帯のアラームが、緊急地震速報が鳴ったので、それで、先生方もびっくりして、表に出た先生方と、机の下にもぐった先生方と、あとは教室にいた先生方といろいろだったんですけども、職員室にいた先生方は、机がすごく動いたので中に閉じ込められてしまった先生もいらっしゃって、それで、自分で机をこじ開けて窓から出たりというかたちで、校庭のほうに避難をしました。

スクールバスの係の先生とか、あと、自宅に引き取っていった子どもの担任の先生なんかは、連絡を取ろうということで、携帯をもう一度取りに行って連絡を取るっていうふうなことです。でも、だんだん電話がつながらなくなってきたのでどうしようかっていうことで、とにかく校庭に1回集まって話をしようということで、中学部はそんなかたちで集まっていました。それが震災直後だったと思います。

・高等部は、14時50分が下校時間です。本校は、通学の形態としまして、自力通学（電車等を利用した通学生）、保護者送迎による通学生、施設の送迎というかたちで3パターンあったわけです。自力通学生については、自分たちで集団下校っていうかたちで近くの夜ノ森駅まで徒歩で向かっている途中ということでした。保護者送迎については、帰宅途中の生徒もいましたし、まだ駐車場に保護者がいる状態の生徒さんもいました。施設のバスについては、ちょうど高等部の玄関のところに迎えに来ている状況だったんですね。そんな中であの大きな揺れを体験したと。

その中で、まず、教頭先生から指示があって、「自宅通学生については全員戻せ」という

ことで、若い先生に走っていただいて迎えに行ってもらった。それで、事なきを得て、全員グラウンドに集めることができた。寒くて、教員の車の中で暖を取りながらいました。

保護者が迎えに来ている子どもたちについては、そこで保護者に引き渡して帰路に着いていただいた。施設からの通学生についても、揺れが、結構余震が続いたもんですから、余震が収まるまではわれわれと一緒にいたんですけど、収まったってということで学園のほうに戻ったということです。

保護者と連絡がつかなくて、なかなか帰宅まで結び付かない子どももいたんですけども、そういった子どもさんについては、近くに居住している先生方に送っていただいたと。本当に何事もなく全員親御さんのもとに届けることができたっていうのは、不幸中の幸いだったかなって。多分、校長先生、教頭先生の判断のもと、若い先生でも一生懸命になって動いてくれましたので、それが功を奏したのではないかなと思っています。

・どンドンと状況が変わって行って、状況が見えないんです、わからないという中で、ワセグのテレビがちょうど映ったときに、津波が来るらしいっていうのがわかって、もうこれは大変なんだということを実感としてだんだん感じ始めた。それまでは、先生方にもある程度揺れが終わったときに、「じゃあ、片付けが終わったら、明日、休みだけど、学校へ来て片付けをしようね」っていう話で別れたんですよ。

それから、学校を避難所として開設をするということで、恐らく、地域の方々がいらっしやるだろうということで、体育館を避難所として開放する準備等を進める中で、一晩体育館に泊まってというふうなことになるんですが、いわきに福島県立聾学校平分校があるんですけども、そこのお子さんが、南相馬から電車通っていたんです。被災されて、教員がその子を連れて南相馬の自宅まで送り届ける途中で、もう道路が大変だった状況で、うちの学校にちょっと明かりが漏れ見えた。ストーブの火だと思えますけど、それでここについていうことで来てみましたっていうことで、一晩泊まって、保護者さんも連絡が付いて、ご両親が学校に来て泊まったという状況もありました。

食べるものがなかったんですけど、学校って探すといろんなのが結構あるんです。だから、ポップコーンが出てきたり、餅が出てきたり、「砂糖がない」って言ったら、「あ、中学校であるな」とかって、あとは醤油とか、そういうので餅を焼いたり、あと、固い大根なんだか芋なんだかわかんない、そういうのを煮て、それで食べたりとかして暖を取ってというかたちで。

あのときは、やっぱり石油ストーブの威力は大事だなと思いました。当然、電気、ガス、水道もインフラはみんなだめになっていましたので。

## 2) 職員の家族の安否・利用者の家族への連絡

・教員の中にも、ちっちゃい子どもさんがいるので1回保育所とか、学校のほうに行って確認したいって言う先生も何人かいらっしやって、その際に校長先生のほうに確認したところ、「やはり戻して1回安否確認したらどうだ」ということで、帰っていかれました。そ

ここで皆さん、自分のお子さんと一緒にいるのかなと思ったら、1回確認したらばまた戻ってきてくれて、児童・生徒のほうの安否を、最後まで保護者のほうに手渡すまでいてくれる先生方が多かったですかね。そんなかたちで、責任を持ってやっていただいたというのがあるがたいなというふうに。

それぞれ若い先生方も含めて、また、そういうちいちゃい子どもさんを持っている親さんも、その先生方も、うちの学校としては、非常にそういう点では力……。私自身、何とかしていかなくちゃいけないなっていうふうには思わせてもらいました。

・携帯ももうほとんどつながらない状況になって、1人相馬（市）から通勤していた先生は、うち半分が津波で持っていかれちゃったんです。体育館の中でその情報がぼつぼつとラジオで入ってくるたびに、本当に天を仰いで、「もう俺の家はだめだ。みんな大丈夫かな」って、連絡も付かない。一晩そういうことで本当に悩んで悩んで過ごされたうちの教員もいます。なので、本当につらい思いをしていたのかなと思います。

### 3) 避難時の様子

・7時前後に富岡町の町内放送で「川内村のほうに避難するように」という放送が。その前に、やはり校長先生と一緒に学校全体を確認して回って、どこら辺が破損してんのかなんていうことで見ていたら、放送がありました。そのあとしばらくしてから青年団の消防車が来て、「本当に避難してくれ」というふうなことで、じゃあっていうことで、皆さん、何人かいたんですが、全員避難っていうことで、それぞれ自分の場所、家経由で避難することにしようということ、そこで別れたかたちなんです。

その前に校長先生と私で東洋学園のほうに行って、とりあえず学園のほうはどうなっているのか、どこに避難するのかという場所の確認をしたうえで、学校に戻り、富岡町まで行って校長先生と別れました。

私は家がいわきなので、いわきのほうに戻る、校長先生は川内のほうに避難するというふうなことで、一旦そこで別れて、また連絡を取ろうというふうな話をされたうえで別れたということです。

・朝、10キロ圏外に出なさいっていう話になっていたもので、じゃあ、残っていた先生はすぐ帰るようになっていうかたちで、われわれが出たのは、多分9時半ぐらいだと思うんです。その時、教頭さんが持ち出したのが、児童・生徒名簿だった。それが、あとですべての連絡の唯一の手掛かりになっていくんですけど、それを持ち出さなかったらまたまた大変な状況があったかなっていうふうに思います。

その当時は、大熊町なんか朝の5時ぐらいから詰め込みでバスに乗せられてっていう状況だったので、うちの事務の方も本当に何も持たない、携帯も持てない状況で、「すぐとにかく避難してください」とバスが来てどんどん詰め込まれる状況で避難されたので。そんな状況でみんなばらばらに。

うちの教員も最初は（富岡町立）富岡第二中学校、あそこは（富岡町立富岡第二）小学

校かな。体育館に避難をして、そこからまた車2台ぐらいに分乗して（川内村立）川内小学校ってところに避難をしてきているっていう。みんな、本当に何も持たずにですね。

・私なんかも、うちに戻って、家族がいたので、とにかく毛布2枚と水を持って、「2、3日で帰ってこれっから」っていうことで、車に乗せて10時過ぎに下に行こうと思ったら、消防団に止められて、「もう富岡駅は津波にのまれてねえし、そんなところ行っちゃだめだ」とかって怒られて、「さっさと行け」って言われて行ったんですけど、十何キロの道を本当に3時間ちょっとぐらいかかってやっと川内小学校に着くっていう状況で、車が数珠つなぎだった。多分、浪江（町）もみんな同じような状況……。浪江町なんですけど。そんな状況で、皆さん、各自ばらばらに避難されていくと。その間、どんどん連絡が取れづらくなっていくということになってきてしまう。

・それで、3月12日に3時36分に爆発が起きて、それを川内小学校で何台かテレビを出していたんですけども、保護者の方も、それからうちの教員も私も含めてその瞬間をテレビで見ているわけです。瞬間っていうか、その映像を。

そうしたら、近くにいた東電の関係の方が、「もうこりゃだめだ。逃げろ」と。そういうことが始まっているうちに、今度は、川内小学校の中で安定ヨウ素剤を配り始めたっていう状況で、何歳から何歳までっていうことで、うちの息子、娘も並んで、若い先生方も並んでっていう状況で、本当にすごい状況の中で何とか避難して。

そのあとからも次から次に避難してくる方もいて、あとで説明しますが、自閉症のお子さん、お母さんと一緒に避難されてきた方は、そのあとが本当に夏休みまで地獄のような苦しみを味わっていくんです。そんな状況があって、それぞれに皆さん避難されて。

浪江のほうなんかは、一番線量が高いような所に避難していくんですよね。情報も何もありませんから。

#### 4) 安否確認

・自宅に帰った教員たちは、自分たちの身を守るだけで、家族を守るんで精いっぱいですね。情報がないので、いわきの方々……。いわきにはそんなに流れてこなかったんですけども、爆発したと。そのあとも今度は3号機も爆発するわけですけど、風向きによって……。あとで情報がわかったからこういう状況ですけど、いわきの方々も、隣近所の方が遠くに避難されてみんないなくなっていくわけですよ。

うちの教員も京都のほうに避難されたりとか、いろんなことで遠くに避難されたり、あとは、新潟のほうに避難されたり、あと、県外あちこちですね。北海道に行かれた方もいらっしゃると思いますいろいろです。青森のほうに、ご実家のほうに行かれた方もいると。そういうことでばらばらの状況ですね。

・そのあとは教頭先生が、ご家族を避難させたあとで、（福島県立）いわき養護学校のほうはそんなに被害がなかったもんですから、そこで安否確認をすぐに始めるっていう状況でした。というのは、当日、1泊して、第二原発の脇を通って、家にやっとたどり着いて、



家族と再会して、確認して、私ももう疲れ切っていたところもあって、その日は寝てしまったんです。次の日に安否確認ってということで、広野の子どもたちを中心にいわきのほうに避難してきている子どもたちが小学校のほうに避難してきているっていう状況があって、そこをちょっと確認しに行ったんです。

そのときには、もう広野、檜葉の人たちが千人以上小学校の中に避難していて、あらゆる教室、あらゆるところが土足で全部……。みんな、本当に狭い中で避難しているっていう状況でした。

そして、その中で先生方が、避難してきた方の名簿作りを、私が行ったところは（いわき市立）草野小っていう小学校だったんですが、そこでやっていたというふうな状況で。名簿を見せていただいて、いるということで、「どどここの教室にいます」といって確認はしたんですが、行ったらもういなくて、また別の小学校に行っていたとかというようなことでした。

職員には1人会ったんですが、「これから、やはりまた（いわき市立）中央台（南小学校）っていうか、もうちょっと南側の小学校のほうに避難します」とか、そういういろいろと話はあったんだけど、なかなかそういう中で会うっていうのも難しいなというふうなところがありました。

・そのあと、うちの教員で、パソコンっていうか、ネットを使っての確認っていうことで、使える職員がいたので、その職員がいわきに行ったので、そこに行って、「何とかなんないのか」という話をしたらば、その職員は、その当時、3月11日の夜、家に帰ったときから携帯の掲示板を立ち上げるっていう作業をしていて、その掲示板を通して先生方がそこに書き込んで、今いる情報をそこに集めましょうというふうなことでやってくれたんです。

それで、じゃあ、それを使おうっていうことで、あと、校長先生に確認して、いいでしょうかっていうことで、「じゃあ、それでとりあえず情報を、先生方の安否、また子どもたちの安否を確認しましょう」というふうなことでした。

それに対して、今度はどういうふうにするかっていうのは、何も無いもんですから、先生方の緊急連絡網の携帯電話も使えないのでCメールで。私はauだったので、とりあえずauで、Cメールで……。今はどこの機種も大丈夫なんだろうけど、その当時はauしかCメールは使えないっていうことで、あと、メールもなかなかわかんないっていうことで、Cメールだったら電話番号だけでできるんで、Cメールでとりあえず全部打ったんですね。

「ここの掲示板にとりあえず連絡くれ」ということで、それで、auの機種を持っていた先生方がその掲示板に掲示して、そして、「誰々がどどこに」、「私はここにいます」というふうなメールから、今度は、それを「近くの先生がわかれば連絡してくれ」というふうなことでだんだん広がって行って、先生方、また子どもたちの安否確認。そして、先生方は、自分の担任している子どもたちのほうに連絡をするっていうふうなことで、「誰々がどどこにいます」というふうなことがだんだん広がっていったっていうことです。

・そのようなことをして行って、全部安否確認できたのは3月17日、大体1週間弱かかった

わけです。実際に、県ともなかなか連絡が取れない、県庁も全部だめで取れなくて、課長さんとやっと連絡が取れたのが教頭さん、いわきにいるってわかって取れて。当時の主管さんのほうから、「校長、自宅というか実家にいっけど、これからどうすんだ」っていう話で、「うちにいて何やんだ」とかっているいろいろ言われて、「だったら、郡山の大槻っていう所に（福島県立）聾学校があつて、そこを借りて、そこに仮の本部を作つて安否確認したらどうだ」ということで、「そっちに行きなさい」ということで、3月14日から、私は、聾学校のほうに毎日行って安否確認。教頭先生に聾学校に1週間ぐらいぶっ続けで泊まりがけでいわきから来てもらって、そして2人で安否確認を始めるっていう状況でした。

## 5) 安否確認の苦勞

・3号機が爆発した時点でみんな遠くに避難するってのは当たり前前の状況で、皆さん、どんどん遠くにいらっしゃるのは当然でしょう。保護者さんも、ほんとにバスに乗せられて、田村町とか三春（町）の体育館に着いたのはいいんだけど、やっぱり自閉のお子さん、小さいまだ小学校のお子さんなんかは入れなくて、お母さんが背負って、ずっと1日中外にいて、寝泊まりは当然車の中って。そういう状況のお子さんがたくさんいらっしゃいましたし。居場所がどんどん変わっていく中で、東洋学園を利用していたおさんは、そこに40人全員いるっていうのはわかるんですけど、それ以外の約80名のおさんがどこに避難されたかっていうのがなかなか難しかったですね。安否確認をしたのは、入学予定者を含めて子どもたち120名以上、教員が78名でした。

・先ほど校長先生からありましたように、朝には避難っていうことで、そのとき、渋滞ということで、「車に乗るな」っていう指示もあったので、車も置いていった先生もいらっしゃいますし、そういうかたちで……。

・若い人たちの中には、ばらばらに逃げるよりもまとまって逃げたほうがいいって考えて、福島の実家に4人ぐらいで一緒に行った人もいました。「俺の実家に行こう」っていうことで、若い先生方は戻るようなかたちでした。

13日、私も家族と一緒にいて、これからどうしようかっていろいろ考えて1日、2日は過ぎたんですけども、掲示板が立ち上がるっていうようなことで、その先生とはちょっと連絡が取れたったんで、その前にメールでだんだん若い先生方は連絡を取り合って、広がりつつあったんです。

・私は郡山に行ったんですけども、郡山周辺にいながらツイッターをやっていて、それで情報をいろいろ得たり、あと、ラジオも途中から聞いたりしていたんですが、ツイッターの中で、「学園のどこにいる、助けてください」っていうふうなツイッターが流れて、それを見て、14日の午前中にほかの先生と、あと、絵本とか、本を届けられる先生がもしあればっていうことで届けに行ったりっていうこともありました。

・避難所を回ろうと思ったのは、大体そこで1回先生方が集まって話しして、回れる人と回れない人がいるので。もちろん、小さいお子さんがいらっしゃったり、あと、遠くに避

難された方は、回ろうとしてもその場所のどこに避難所があるかっていうのがわからないんですね。車で行って、小学校とかそういったところに行くんですけども、川内に行っても郡山に行ってもいろんな場所が避難所でわからない状況で、まず、避難所がどこなのかっていうのをホームページで探したり、ラジオで聞いたりして探して。そこから避難所のほうに電話をかけるんですけども、避難所も来ている人、出る人がすごく多いので把握できない状況なんです。それが、大体18日の夜なんだけど。

それで、だんだん名簿ができあがってくるので、何回も同じ避難所に……。例えば、会津から三春に電話をかけて避難所の確認をしたり、あとは、実際に、特に、独身の先生方が多かったんですけども、福島辺りで自転車で回られた方もいらっしゃいます。あとは、実際、私は、郡山から会津に行つて、張り紙をして、「富岡養護、ここに連絡ください」ということで。校長先生、教頭先生が本部を立てられていたんで、その電話番号を書いてきて、「ここに連絡ください」と。その張り紙があれば、「富岡養護」という名前を見れば安心される方もいらっしゃるだろうなというところで、そんな張り紙をしていました（会津で2カ所で、大熊が2カ所、三春2・3カ所）。やっぱり電話とか、ラジオとか、あと実際に顔を合わせればそれが一番よかったんですけども、できないっていうところで、じゃあ、どんどん自分の携帯を使って避難所に電話をしていくとか、テレビのテロップとか、そういう効力がすごく大きかったんじゃないかと。

・父親に、「ガソリンもねえのに、何でおまえがそこまでやる必要があんだ」と怒られながらも避難所回りをしていた教員もいるんです。

だから、そのときには、学校の立場上どうのこうのじゃなくて、みんな、今、自分ができることは何かということで、本当に何か正義感に燃えてというか、本当にそのときにうちの教員ってすごいなと思ったのは、一番そういうところです。で、「いました。元気でした」とおんぶしてきた、写真を撮ったり、そして、それを報告してくれたりするわけです。

・まずは、うちの教員で郡山に避難した方、来られる人は、センターに本部ができるので、まず来て、顔を見せてという、始まりはそこからです。なので、あとは、自主的に、ボランティアで（福島県立）郡山養護学校っていう肢体不自由の養護学校が避難所になっているので、そこでやりたいんですけど、お願いしますとか、そういう先生方がどんどん集まってきました。

そして、子どもたちの安否確認で、廊下に地図があるんですけども、そこに付箋で、「今、ここにいます」、「ここにいます」というのを全部やってくれて。そういう仕事をして、子どもたちの安否確認、あと、今後のことについて、ちょっとみんな不安だったと思うんですけども、動き始まった。

ただ、全員が集まるのが……。4月1日の職員会議まで、みんなそれぞれの避難場所にいましたので。でも、その間に山梨に避難した方が帰ってきたりとか、それで避難所を回ってくれたりとか。本当にうちの教員の思ってたすごいなと。

あと、お子さんのことがあって、いろいろ東京へ行ったり、山梨へ行ったり、あっちこつ

ち回って、すごく悩んで悩んでどうしていいかわからない状況で悶々としている方もいらっしやったり。いろんな状況の方がたくさんいらっしやる中で、とにかく動ける人だけで安否確認、その他をやっ払いこうということでやって。

## 6) 再会と再開

・聾学校に寄宿舎っていうのがあって、そこが避難所になっていたのて、当時、70から80名ぐらい避難の方がいらっしやっていて、そこにうちの教員だった方も来て、名前を見て、会って、もうほんとに涙ぼろぼろですから。会えたって、同じ仲間に会えたっていうのが一番あったみたいで、「こういう掲示板があるよ」っていうことで知らせたら、「わかった」っっていうことで、ほんとに喜んだ方もいらっしやいます。

あとは、看護師さんがいらっしやったんですけども、ここにおいて、これから福島に行きますっていうことで、本当に泣き泣き行かれた方もいらっしやいます。避難場所は、先生方によって本当に6カ所も7カ所も保護者も含めて変わっていくので、私の立場としては、先生方も県内でどっちに落ち着いていくのかな、子どもたちもどういふうな動きをしていくのかなっていうのは……。

・子どもたちも、「今、元気にしています」とか、われわれが逆に励まされたのもあります。「聾学校の電話番号で、今、仮の本部をやっています」っっていうと、「今、ここにいるけど、元気か」とかって保護者さんから逆に励まされて。避難所に行って、元気に、何ていうか、励ましているうちの子どももいました。ダウン症のお子さんで、避難所に行っても暗い顔はしていないという、本当にみんなの太陽になってやっ払いいるような、そういう明るさを持った方もいて、避難所巡りをしてちょっと癒された先生もいました。

・その後、うちの学校をどうするんだっっていうことで、私は県のほうとのやり取りがこの辺から始まるんです。なので、「学校を残してください」と。「でも、先生方はばらばらだ。子どももばらばらだ。そうやっ払い学校を残すっ払いどういふうことだ」といふうことを言われたので、「多分、それぞれの避難所にだんだん固まりつつあるだろうから、そういう学校に教室を作っ払いもらって、うちの教員も避難しているから、そっ払いから学校に通っ払いできるようなシステムはないですか」といふうことで、分教室っ払いいふうかたちを取っ払いもらっ払い。

最初、7校にですな。 (福島県立) 会津 (養護学校) だっ払い、 (福島県立) 大笹生 (養護学校) だっ払い、 (福島県立) あぶくま (養護学校) だっ払い、いふうんな県内、 (福島県立) いわき養護 (学校) もありましし、 (福島県立) 相馬養護 (学校) もありましし、あと、会津、 (福島県) 猪苗代 (養護学校) もあります。

そういうところに、最初7校に分教室を作っ払いもらっ払いいふうことで、4月1日に先生方に、今後どうすると、今後、あなた方はどこに当面住むかといふうことを一番聞きたくて。そうしなないと、配置も何もできないので、その日に全国各地に散らばっ払いいる先生が全員集まっ払い、そこで職員会議を開いて。

そのあと、何時間かかったかわかりませんが、1人ずつ、「今、どこにおいて、今後どうい